

<p>「頭上から何かわからない目が見つめているのを感じる。うなじの毛もちくちくする。どういわけだか知らないが、何かの審判を受け、求められているような気分だ」</p> <p>このターン、開始プレイヤートークンは移動しない。</p>	<p>「次の日、私は影や不意の動きに飛びかかるようになっていた。こんなものを見た人々が私をどう思うか、想像に難くない。おそらくは精神病院を逃げ出してきた輩だと考えるだろう」</p> <p>正気-1。このターン、開始プレイヤートークンは移動しない。</p>	<p>「その夜、私は闇の中で迷子になった夢を見た — 唯一聞こえるのはだんだん近くなる足音で、それは私が恐怖に捕らえられたまま目を覚ますまで続いた」</p> <p>1番の塵デッキにカードが残っているなら、それらを全て捨てる。このターン、開始プレイヤートークンは移動しない。</p>	<p>「無意識に私が抱えていた重さは、今朝になって肩から降りていった。足取りも気楽で軽やかになった。私はそれが単なる執行猶予にとどまらないものだと考えるほど、無教養な愚か者だったのだ。」</p> <p>このカードと1番の塵デッキの捨て札をデッキに戻してシャッフルする。このターン、開始プレイヤートークンは移動しない。</p>
<p>「背後に柔らかく小さな足音が聞こえたような気がしたが、振り返るとそこには何も無かった」</p> <p>このターン、開始プレイヤートークンは移動しない。</p>	<p>「恐怖に満ちた光景の終わらない夢は、私に実際に害を与え始めていた。目の下には隈ができ、震える手は私に目をやった人々に何かを告げていた」</p> <p>正気-1。このターン、開始プレイヤートークンは移動しない。</p>	<p>「その夜、床についた後、奇妙な不安が私を捕らえ、私は天井を見つめたまま、涙がその映像を至らせていた。眠りが訪れるまでは、そこからかなりの時間が必要だった」</p> <p>2番の塵デッキにカードが残っているなら、それらを全て捨てる。このターン、開始プレイヤートークンは移動しない。</p>	<p>「何らかの理由で、その夜の夢は静かで穏やかなものだった。おそらく見えざる追跡者は、他の哀れな魂の下へ移ったのだろう」</p> <p>このカードと2番の塵デッキの捨て札をデッキに戻してシャッフルする。このターン、開始プレイヤートークンは移動しない。</p>
<p>「私をつけ回していた見えざる存在は、さらに近くまで来たようだ。その日の終わりには、私の手は固く握りしめられ、無理矢理開くまで嫌な痛みを刻んでいた」</p> <p>正気-1。このターン、開始プレイヤートークンは移動しない。</p>	<p>「背後に小さな足音が聞こえた時、私は恐怖に振り返った。しかしこれまでと同様に、そこには何も無かった。しかし今回は、乳呑み児のような小さな足跡が一つ、土の地面に完璧な形で残されていた。」</p> <p>正気-1。このターン、開始プレイヤートークンは移動しない。</p>	<p>「だったらと続く日中、私は自分をつけ回す何かを打ちのめす事を願っているのに気付いた。それが私の死を意味するとしても、この終わりの無い煉獄よりひどいものなど存在しない」</p> <p>正気-1。このターン、開始プレイヤートークンは移動しない。</p>	<p>「お願いだ……誰か助けてくれないか？」</p> <p>開始プレイヤーは喰われる。各塵デッキとその捨て札を合わせてシャッフルし、新たに3つの塵デッキを作る。開始プレイヤーマーカーを左に渡す。</p> <p style="text-align: center;">この上で切る</p>